

令和元年6月11日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26284048

研究課題名（和文）ドイツの文学・思想におけるトポスとしての「黙示録文化」「終末」の終末は可能か

研究課題名（英文）Die apokalyptische Kultur als Topos in der deutschen Literatur und Geistesgeschichte. Ist das 'Ende' vom Ende moeglich?

研究代表者

小黑 康正 (Oguro, Yasumasa)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：10294852

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、12世紀イタリアの修道院長フィオーレのヨアキムが近現代ドイツの文学や思想に与えた影響を「ネオ・ヨアキム主義」Neo-Joachimismus と名づけ、レッシング、ヘーゲル、イブセン、メレシコフスキー、カンディンスキー、ルードルフ・カスナー、トーマス・マン、メラール・ファン・デン・ブルックや第一次世界大戦時の日本における「第三の国」Das dritte Reich を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「第三帝国」という言葉はナチス・ドイツの別称として知られている。しかしながら、12世紀イタリアで生じた「三」の思想は、ナチスの語彙使用とは異なる意味で用いられ、ヨーロッパやロシア、それに日本に重大な影響を与えた。本研究では、第二次世界大戦期の「第三帝国」Das Dritte Reich と区別するために、それ以前の「第三のライヒ」をめぐる思想を「第三の国」Das dritte Reich と称し、特にイブセン、メレシコフスキー、カンディンスキー、カスナー、マン、日本における展開を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study named the influence that Joachim of Fiore had on modern literature and thought in Germany as Neo-Joachimismus, and clarified "Das dritte Reich" in Lessing, Hegel, Ibsen, Mereschkowski, Kandinsky, Rudolf Kassner, Thomas Mann, Moeller van den Bruck and Japan during World War I.

研究分野：近現代ドイツの文学ならびに思想

キーワード：第三の国 第三帝国 フィオーレのヨアキム 黙示録 トーマス・マン メレシコフスキー カンディンスキー ルードルフ・カスナー

## 1. 研究開始当初の背景

キリスト教文化圏の文化や思想を決定づけた聖書は、冒頭の「創世紀」において世界の始原を描き、最後の「ヨハネの黙示録」において世界の終末を示す。「始原と終末の枠構造」に刻印されたキリスト教文化圏では、新しい都市 (Stadt)・国 (Staat)・状況 (Status) を希求する意識が、徹底的な終末意識と局面打開の情念に基づいて、強く働いてきた。

聖書の冒頭 (創世紀)		聖書の最後 (黙示録)
エデンの園	→ 人間の歴史 →	新しいエルサレム
楽園 (庭園)	(千年王国 / 第三の国)	神の国 (都市)
自然 (有機的空間)		人工 (無機的空間)
「像」Bild		「模像」Abbild

聖書の最後に配され、多種多様な幻視とともに歴史の最後を扱う黙示録は、諸芸術に多くの素材を提供し続けながら、ヨーロッパの歴史意識を形成し、E・R・クルツィウスに依拠して言えば、同時に類型的な「表現」あるいは「思考」としての黙示録のトポスを培ってきた。総じてヨーロッパの文化や思想は、特定の状況や問題において、それに見合う古代の伝統的な表現や思考をほとんど「常套句」のように必要としながらも、それを新たな状況やコンテキストの中に組み込んでいく。その結果、古代の「常套句」は多少の変容を蒙りながらも、ある程度原型を失わずに現代に蘇り、しかも新たなものを吸収し、増殖し、再び根源に戻っていく。トーマス・マンの言を援用するならば、こうして「帰帰する諸モチーフに満たされた一つの濃密な伝統領域」が黙示録を出自として形成されてきた。これがすなわちトポスとしての「黙示録文化」である。

人間の歴史は、聖書的な歴史認識によると、エデンの園を追放された時に始まり、新しいエルサレムに入る時に終る。このような目的論的であり、不可逆的であり、直線的である神学的な歴史意識が、さまざまな世俗化を経ながらも、キリスト教文化圏を決定的に刻印してきた。本研究で注目するのは、「始原」と「終末」に挟まれた「歴史」をあえて数的に分割しようとする二つの志向である。ひとつは黙示録の前近代的な受容として終末論的な「民衆」運動を生み出した「千年王国説」であり、もうひとつは黙示録の近代的な受容として弁証法的かつ歴史哲学的な「精神」運動を生み出した「第三の国」をめぐる思想である。

「千年王国説」も「第三の国」の思想とともに黙示録に基づく。しかし、従来の研究では、N・コーン『千年王国の追求』(1961)やK・フォンドゥングの研究(Klaus Vondung: Apokalypse in Deutschland. München 1988.)が示すように、それぞれ独自の個別現象として考察されてきた。このことは、近年の代表的研究(G. R. Kaiser (Hrsg.): Poesie der Apokalypse. Würzburg 1991; B. U. Schipper u. G. Plasger (Hrsg.): Apokalyptik und kein Ende? Göttingen 2007.)でも同様のことが言えよう。総じてドイツにおける黙示録受容(特に「ネオ・ヨアキム主義」)の研究は、保守思想との深い結びつきゆえに困難を極め、いまだ十分に展開していない。

## 2. 研究の目的

本研究では、ドイツの文学・哲学・美学ならびにギリシア古典や中世文学における碩学の協力を得て、近現代ドイツにおける「黙示録文化」の全体像を明らかにする。その際、「第三の国」Das dritte Reich の思想が、レッシング、ヘーゲル、イプセン、メレシコフスキー、カンディンスキー、メラー・ファン・デン・ブルックなどに顕著に見られるような弁証法的かつ歴史哲学的な「ネオ・ヨアキム主義」を促しながら「第三帝国」Das dritte Reich へと行き着く過程を主として検討する。

## 3. 研究の方法

本研究は、国際的な共同研究の基盤を築くために、(1) 関連領域で卓越した業績をあげている研究者から研究組織を編成し、九州大学での研究会(九大独文科学研究会)を活動の中心に据えた共同研究を行う。(2) その際、文献学的方法や文学的トポス論の視点を重視し、併せて歴史哲学や美学ならびに芸術学の視点も導入し、ギリシア古典の視座から本研究の相対化もはかる。(3) 考察対象を主として近現代ドイツとしながらも、近代日本における「第三の国」や現代日本の黙示録的言説も併せて検討し、研究成果を積極的に発信しながら、新たな「黙示録文化」研究の国際的な基盤構築をめざす。

## 4. 研究成果

[平成26年度]

第1回の九大独文科学研究会は、平成26年9月12日と13日に行った。出席者数は、研究代表者1名、研究分担者3名、その他18名、合計22名である。初日は、研究代表者が研究プロジェクトの全体説明を行った後、①小黒康正「始原と終末の枠物語——「千」から「三」へ」と②古澤ゆう子の「終末の無い時概念?——プラトン『国家』10巻における魂の不死と輪廻転生」の研究発表に基づいて、二日目は、③香田芳樹の「中

世の女性たちのみた世界の終わり」と④嶋田洋一郎の「始原と終末の杵物語——「千」から「三」へ——『マラナ・タ』(1779)を中心に——」の研究発表に基づいて質疑応答を行った。総じてヨハネの黙示録ならびにその受容史を中心に考察を行い、併せてギリシア的時間概念との比較を通じて黙示録的な歴史観の相対化を図ったと言える。

第2回の九大独文科学研究会は、使用言語をドイツ語とする国際コロキウム「Das 1. internationale Kolloquium des germanistischen Seminars an der Universität Kyushu」として平成27年3月10日と11日に行ったところ、合計26名が参加した。初日に行われた研究発表は、①Yasumasa Oguro (Fukuoka) 「Die apokalyptische Kultur als Topos in der deutschen Literatur und Geistesgeschichte. Ist das ‚Ende‘ vom Ende möglich?」、②Sascha Monhoff (Aichi) 「Subjektive Apokalypsen — Todesreflexion als Offenbarungsakt bei Elias Canetti.」、③Wolfgang Braungart (Bielefeld) 「Die Apokalypse — eine literarische Gattung? Einige historisch-systematische Thesen, ausgehend von Brechts ‚Hauspostille‘.」である。二日目に行われた研究発表は、④Toshikatsu Takeda (Fukuoka) 「Geste der Grenzüberschreitung.」、⑤André Reichart (Fukuoka) 「Die fröhliche Apokalypse. Wiener Weltenden um 1900.」、⑥Keita Fukumoto (Fukuoka) 「Die Offenbarung des Geheimnisses — „Inflationspropheten“ oder die Inflation der Propheten.」であり、両日とも近現代ドイツの文学ならびに思想の諸事例に基づいて考察を行った。

#### [平成27年度]

研究代表者は、2015年4月6日から2016年3月20日までの間、ウィーン大学の客員研究員として、研究活動を行った。この間、ドイツの5大学から講演の招待を受け、各大学のドイツ文学研究所にて、ドイツにおける黙示録文化に関する講演をドイツ語で行ったことは、特筆に値する。5回の招待講演を示すと、〔1〕ミュンスター大学(招待者 Martina Wagner-Egelhaaf 教授、2015年11月2日)、〔2〕ビーレフェルト大学(招待者 Wolfgang Braungart 教授、2015年11月5日)、〔3〕ブラウンシュヴァイク工科大学(招待者 Renate Stauf 教授、2015年12月10日)、〔4〕アイヒシュテット・インゴルシュタット大学(招待者 Michael Neumann 教授、2016年1月20日)、〔5〕フランクフルト大学(招待者 Johannes Fried 教授、2016年2月17日)であった。

また、研究代表者は一時帰国し、平成27年8月20日に第3回九大独文科学研究会を企画する。午前の部では、東口豊の「ハイデガーにおけるヘーゲルの所謂「藝術終焉論」批判について」と、桐原隆弘の「カントにおけるアウグスティヌス的展望とヨアキムの展望 — 「理性宗教の原理」を手がかりに」に基づいて、午後の部では、小黒康正の「杵を外された歴史—エーファ・ホルン『破局としての未来』(2014)をめぐる」、坂本貴志の「古代神学的諸世界」対「無鬼論的諷刺」—アタナシウス・キルヒヤーと山片蟠桃の宇宙論および比較宗教論について—、杵淵博樹の「人類の教育」と黙示録—ギュンター・グラス『女ねずみ』における滅亡の風景」に基づいて意見交換を行い、黙示録文化の多様性と同一性を確認した。

#### [平成28年度]

研究代表者は8月3日にバイエルン独日協会の招待で講演を行い、2016年8月23日から26日までの間にソウルで開催された「アジア地区ゲルマニスト会議」では、これまでの研究成果を国際的に発信するため、小黒康正、André Reichart、Marcus Conrad、徳永恭子、坂本貴志がそれぞれ研究発表を行った。

更に本研究プロジェクトでは、創作の観点も取り込んで、黙示録文化に関する考察を更に深めようとする。世界の終末はいまだ誰も経験したことがない。それにもかかわらず、世界の終末はさまざまな文学作品において繰り返し扱われてきた。しかも、未来を破局として描くもの、「終末」から物語を始めるものが少なくない。それはなぜか。そもそも誰も未経験な終末がいかんにして表現可能になっているのか。以上のような問いを作家の多和田葉子氏に立てたところ、多和田葉子朗読会が第4回九大独文科学研究会として2016年9月19日に九州大学文学部で開催されることとなった。

2017年2月11日には、九州大学文学部で第5回九大独文科学研究会を行う。その際にお迎えしたのが、ウィーン大学のEva Horn教授である。同会は2回目の国際コロキウムでもあった。研究発表を担当したのは、小黒康正、嶋田洋一郎、徳永恭子、Horn教授である。更に、同教授には、第6回九大独文科学研究会として、2017年2月14日に京都大学文学部でも講演をしていただいた。

#### [平成29年度]

研究代表者は日本独文学会機関誌『Neue Beiträge zur Germanistik』153号(2017年2月発行の国際誌)のトーマス・マン特集に編集責任者としてかかわった際にマン文学に造詣が深い芥川賞作家の平野啓一郎氏に寄稿の協力を仰いだ。そのことが契機となり、7月15日に九州大学文学部で平野啓一郎講演会「破滅と希望」を第7回九大独文科学研究会として企画、そして9月13日には、ドイツのバイエルン独日協会の協力を得てミュンヘンの王宮で平野啓一郎ミュンヘン講演会を第8回九大独文科学研究会として行なった。

更に研究代表者は、上記の講演会后、9月15日から16日の間にミュンヘン近郊のバード・テレッツで行われた国際トーマス・マン学会に参加して、ハンス・ヴィスキルヒェン会長をはじめとするマン研究者と意見交換を行い、その後はウィーン大学のエーファ・ホルン教授と今後の研究計画を相談するなど、本研究を一層進展させることができたと考える。実際、先に名前を挙げたハンス・ヴィスキルヒェン会長を日本に招聘して、第9回九大独文科学研究会としてドイツ語による国際シンポジウム「Symposium anlässlich des 30-jährigen Jubiläums des Arbeitskreises Thomas-Mann-Forschung」を3月7日に京都の龍谷大学で行い、更に3月10日には、九州大学大学院人文科学研究院、西日本日独協会、日本独文学会西日本支部などの関連団体の協力を仰ぎながら、ハンス・ヴィスキルヒェン特別講演会「トーマス・マンと日本」を九州大学文学部で行なった。

〔平成30年度〕

本研究の最終年度には、二つの重要な国際的な学術交流を行った。まず第一に研究代表者が2018年8月28日にミュンヘンの王宮にて再び招待講演をドイツ語にて行ったことが挙げられよう。講演題目「Das dritte Reich in Japan und Deutschland vor dem ersten Weltkrieg —Henrik Ibsen, Dmitri Mereschkowski und Thomas Mann」のもとで、日独の多くの方々との問題の共有を図ることができたと思う。第二に、フランクフルト大学名誉教授でドイツ中世史の碩学であるヨハネス・フリート氏との学術交流も重要である。研究代表者は既にフランクフルト大学で本研究プロジェクトに関係する招待講演をドイツ語にて行っていたが、今回はフリート教授に来日してもらい、国際コロキウム（第10回九大独文科学研究会）を2018年9月25日に開催した。研究発表を行ったのは小黒康正、ヤーマス・グディアン、嶋田洋一郎、ヨハネス・フリートである。更に、フリート教授には、本プロジェクトに密接に関連するテーマで、9月27日に南山大学で、9月28日には日本独文学会秋季研究発表会（名古屋大学）で招待講演をしてもらった。他に、研究代表者が三田文学会の依頼を受けて「三田文學」第134号（8月1日発行）に「第三の国」をめぐる戦い——イブセン、メレシコフスキー、トーマス・マン」を投稿したことや、12月8日に開催された北海道ドイツ文学会 第86回研究発表会（北海道大学）で研究発表「ルードルフ・カスナーの観相学的世界像 ——「第三の国」をめぐる」を行ったことも特筆に値しよう。以上の三件では、五年間の研究を総括した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

小黒康正、「第三の国」をめぐる戦い——イブセン、メレシコフスキー、トーマス・マン、三田文学会、「三田文學」、第134号、2018、197-207。

小黒康正、（書評）ヨーロッパ反骨思想の「原史」 清貧思想と黙示録をめぐる。香田芳樹著『魂深き人びと 西欧中世からの反骨精神』（青灯社） 週刊読書人、査読無、第3199号、2017、8-8。

Yasumasa Oguro, *Der Zauberberg und Doktor Faustus als apokalyptische Zwillinge. —Thomas Manns Kampf um ein drittes Reich—*, Neue Beiträge zur Germanistik. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik, 査読有, Band 15 / Heft 2, 2016, 78-96.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgg/153/0/153\\_78/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgg/153/0/153_78/_pdf)

嶋田洋一郎、ヘルダーにおける翻訳の理論と実践、思想、査読有、第1105号、2016、55-71。

Keita Fukumoto, *Das Organische und das Unorganische bei Doktor Faustus —Das III. Kapitel als Paradigma des gesamten Romans—*, Neue Beiträge zur Germanistik. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik, 査読有, Band 15 / Heft 2, 2016, 112-129.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgg/153/0/153\\_112/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgg/153/0/153_112/_pdf)

<http://dokushojin.com/article.html?i=1751>

武田利勝、哲学という実験—フリードリヒ・シュレーゲルの『超越論的哲学』、九州ドイツ文学、査読有、巻30、2016、1-21。

[https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac\\_download\\_md/2228892/p001.pdf](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/2228892/p001.pdf)

〔学会発表〕（計5件）

Yasumasa Oguro, *Das dritte Reich in Japan und Deutschland vor dem ersten Weltkrieg —Henrik Ibsen, Dmitri Mereschkowski und Thomas Mann, Deutsch-Japanische Gesellschaft in Bayern e.V.*, 2018.

小黒康正、ルードルフ・カスナーの観相学的世界像—「第三の国」をめぐる、北海道ドイツ文学会 第86回研究発表会（北海道大学）、2018。

嶋田洋一郎、ヘルダー研究の現在と未来、日本シェリング協会、2018。

武田利勝、シンポジウム「詩と哲学の饗宴——1800年前後における総合的思考の生成」、第72回日本独文学会春季研究発表会（早稲田大学）、2018。

Yasumasa Oguro, *Der Kampf um das Dritte Reich vor dem Ersten Weltkrieg. Die Dmitri Mereschkowski-Rezeption in Deutschland und Japan, Asiatische Germanistentagung 2016 in Seoul*, 2016. 8. 24.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：嶋田洋一郎      ローマ字氏名：SHIMADA, Yoichiro  
所属研究機関名：九州大学      部局名：大学院比較社会文化研究院  
職名：教授      研究者番号(8桁)：30206180

研究分担者氏名：福元圭太      ローマ字氏名：FUKUMOTO, Keita  
所属研究機関名：九州大学      部局名：大学院言語文化研究院  
職名：教授      研究者番号(8桁)：30218953

研究分担者氏名：武田利勝      ローマ字氏名：TAKEDA, Toshikatsu  
所属研究機関名：九州大学      部局名：大学院人文科学研究院  
職名：教授      研究者番号(8桁)：80367002

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：ライヒャルト、アンドレ      ローマ字氏名：REICHART, André  
研究協力者氏名：東口豊      ローマ字氏名：HIGASHIGUCHI, Yutaka  
研究協力者氏名：富重純子      ローマ字氏名：TOMISHIGE, Junko  
研究協力者氏名：杵淵博樹      ローマ字氏名：KINEFUCHI, Hiroki  
研究協力者氏名：桐原隆弘      ローマ字氏名：KIRIHARA, Takahiro  
研究協力者氏名：コンラート、マルクス      ローマ字氏名：CONRAD, Marcus  
研究協力者氏名：モンホフ、ザシャ      ローマ字氏名：MONHOFF, Sascha  
研究協力者氏名：古澤ゆう子      ローマ字氏名：FURUSAWA Yuko  
研究協力者氏名：坂本貴志      ローマ字氏名：SAKAMOTO, Takashi  
研究協力者氏名：香田芳樹      ローマ字氏名：KODA, Yoshiki  
研究協力者氏名：クラヴィッター、アルネ      ローマ字氏名：KLAWITTER, Arne  
研究協力者氏名：ブラウンガルト、ボルフガング      ローマ字氏名：BRAUNGART, Wolfgang  
研究協力者氏名：ホルン、エーファ      ローマ字氏名：HORN, Eva  
研究協力者氏名：ヴィスキルヒェン、ハンス      ローマ字氏名：WISSKIRCHEN, Hans  
研究協力者氏名：フリート、ヨハネス      ローマ字氏名：FRIED, Johannes

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。